

## 平和について考えよう！

広島大学附属三原中学校 安井盛一

米子市立尚徳中学校 高石博史

米子市立後藤ヶ丘中学校 宇城 明

私は広島県で中学校の教師をしています。今年の春にある集会があり、そこで私は約20人の中国地方の先生たちと出会いました。そして私たちは6グループに分かれて、国際理解をすすめるための教材をつくることになりました。私のグループは、私と2名の鳥取県の中学校の先生たちとの3人で構成されました。そして私たちは夏休みを利用してアメリカ合衆国（以降アメリカと表記）を訪れることになり、そのための準備を各グループで進めてきました。

次の資料は、私たち3人がアメリカを訪れる前の準備から、実際に訪問して体験したことを記録したものです。

なおアメリカでの訪問先は、ミネソタ州のミネアポリス（3日）、ワシントンD.C.（2日）、ノースカロライナ州のグリーンビル（7日）です。そしてミネアポリスとグリーンビルでは、各チームごとに1人のパートナーが現地調査と教材づくりに協力してくださるということでした。

### 〈アメリカ訪問前〉

事前の話し合いでは、どのような教材をつくるか、またそのためにアメリカでどのような現地調査を行うかが中心の議題になりました。

あなたならどのようなテーマを設定してみたいですか？

また、どのような現地調査をしてみたいですか？

私たちは、今年が第2次大戦後50年という節目の年にあたるということから、「平和」をテーマにしようということになりました。そして、私たちの学校でも使えるようなものにしたかったので、日本とアメリカ合衆国の中学生を対象にして、「平和」に関する考え方をインタビューを通して調査することに決まりました。それからの話題は、もうすでにアメリカに渡った場面を創造しながら進んでいき、「アメリカの中学校の教室で生徒たちにインタビューする」「アメリカの教師たちに平和教育をどのようにすすめているのかをインタビューする」という計画が立てられました。そしてそのような内容の計画が可能かどうかを、アメリカのパートナーに手紙で確認をしました。そして、約1ヵ月後、パートナーから

の返事が届きました。そこには、私たちの計画がいずれも実現が困難であるということが書かれていました。

どうして難しいのか、わかりますか？

もちろん英語を上手に話すことができないから、実際にインタビューしようとしても聞きたいことを聞けない、という問題もあります。しかし、問題はもっと根本的なものでした。

それは、私たちが訪問する頃、アメリカの学校は夏休み中で、生徒が学校にいないということ。また、アメリカでは9月が新学期になるので、教師たちは私たちが訪問する8月中旬ころからそのための準備に忙しくて、インタビューに応じるような時間をゆとりがない、というようなことでした。

夏休みといっても、日本とアメリカでは、生徒や先生たちの過ごし方がずいぶん異なっているのだということに気づかされました。

それならアメリカの学校が夏休みにはいる前にアンケート用紙を送って、生徒たちに書いてもらおうと考えましたが、そのときは6月末だったので、航空便で送っても現地に着く頃には休暇に入ってしまう時期になるので、その計画も難しいということでした。

「私たちの夢は崩れさるのか・・・」と困っていたとき、他のグループの先生がアドバイスをしてくださいました。

どんなアドバイスだったと思いますか？

それは、アメリカの学校でアンケートしなくても別の場所で可能になるかもしれない、というものでした。アメリカでは夏休み中に「サマースクール」がいろんなところで行われているから、そこに参加している生徒たちにアンケートの依頼をする可能性を教えてくださったのです。そして、そのような可能性にかけるような思いで、パートナーにアンケート用紙を送りました。私たちは「うまく集められればいいな」と願うだけでした。

また、アメリカでのアンケートを期待しつつ、私たちはそれぞれの学校で日本の中学生の「平和」に関する意見文を書いてもらい、それらを英語訳していました。

日本の中学生にはジョン・レノンの『イマジン』という曲を聴いてもらい、歌詞にこめられた彼の意見を知ってもらい、その後で自分の意見を書いてもらうようにしました。私は生徒たちに日本文で書いてもらい、他の2人の先生たちは英文で書いてもらいました。どちらも一長一短ですが、結果的には英文で書いてもらう方がよかったです。

どうして英文で書く方がよいと思ったのでしょうか？

理由は2つあります。1つ目は、書いてもらった日本文をさらに英訳するのがかなり大変だという理由です。特に私のように英語が苦手な者にとっては、時間がいくらあっても足りませんでした。2つ目は、実際にアメリカ人と話したとき英単語を並べただけでも会話が成り立っていましたので、文法的に不十分な英語でも現地で自分が補足すれば、内容はなんとか通じていくのではないかという理由です。

このようないきさつを経て、私たちは日本の中学生123名分の意見文を持ってアメリカに渡ることになりました。

## 〈最初の訪問地：ミネアポリス〉

ミネアポリスでパートナーのエリザベスさんに会いました。1歳の男の子をもつ女性です。彼女は私たちが事前に依頼した意見文を、できる範囲で集めてくださいました。特に「原爆投下について」というテーマで7人の方に意見を書いてもらつたものについて、彼女は私たちに熱心に説明して下さいました。書かれてあることや話されていることがさっぱりわからないという不安は確かにありました。彼女の態度を見ているうちに、何かアメリカでの生活に希望が見えてきたようなワクワクする気持ちになっていきました。

言葉が理解できないのに、どうして私は不安をつのらせるのではなく、期待感を高めたのだと思いますか？

私が期待感を強く感じたのは、次のような理由からです。私は、英単語の意味がわからず話すこともできないという「引け目」を感じながら彼女に接していましたが、彼女の態度には彼女が私を「劣っている人間」ととらえているようなところが全く感じられませんでした。こう慢であっても不思議でないと思っていた私は、むしろ謙虚に私たちに接してくれる彼女の態度に感動しました。だから最初はただ彼女の話を聞くだけでしたが、宇城さんが通訳してくれる内容に対して質問してみようという気になっていったのです。

ホテルに帰った私たちは、エリザベスさんからいただいた意見文を英和辞典を片手に必死で翻訳していました。限られたミネアポリスでの滞在中に、できるだけエリザベスさんに質問したいという気持ちになったからです。

それの中で、私たちが特に興味をもったのは2名の男性が書いた意見文です。2人とも実際に太平洋戦争に兵士として参加していたので、その人たちにとっての「原爆の意味」を知りたいと思いました。2人の意見文の概要は次の通りです。なお、レオ・シマーさんはエリザベスさんのお父さんです。

―― ロバート・ワグナーさん（71歳、男）――

私が、戦場から家に帰ることができたのは、1945年の7月のこと。これは日本との戦争が終わるより1か月も前のことでした。その理由は、私と同じように軍隊にいた2人の兄弟が、ともに日本軍との戦いで命を落としたために、ひとり残された息子である自分が、家族の元へ返されることになったからである。もちろん戦死したのは私の兄弟ばかりではない。私の学生時代の親友は、B29に乗っていて東京上空で戦死したし、高校時代のバスケットボールチームの監督はフィリピンで日本軍の捕虜となり、虐待されて殺された。軍隊に入ってから仲の良かった2人は乗っていた船もろとも海の底に消えたし、あの日本の『カミカゼ』の攻撃で死んだ男も知っている。

そのころ、ラジオで流される戦争についてのニュースは、政府にとって都合のいい、きれいごとばかりだった。1日を生きのびて基地に帰り、食堂に行くと、仲間との会話の中に、本当の戦争が見えてくるのだ。－『あいつが死んだ。』『あいつも帰ってこない。』

勝利の日は近いと思われたが、沖縄であれほどの抵抗を示した日本兵は、本土決戦ともなれば祖国と天皇を守るために、さらに死にものぐるいで抵抗することは十分に予想できた。そうした抵抗を弱めるため、東京大空襲であったような一般市民に対しての攻撃が、当時は認められていたのである。－そして原爆は投下された。

それについて、我々が当時どのように感じたか？

『ほっとした。』－なぜならそれは、日米双方にとって流血の終わりを意味したからである。

軍隊と戦場を経験してきた私が言えることは、『戦争』という時代においては、自分たちの命が、相手のそれよりも優先されるのは当然だ－ということなのである。

―― レオ・シマーさん（78歳、男）――

一番恐ろしいのは、権力を握った人間が、国民に自分の考えを一方的に押しつけることだと思う。邪悪な心を持つ人物（ヒトラーのような）が集団を支配するようになると、一人ひとりの知性や良識なんてものは無視されるに違いない。例えば、日本人はすばらしい文化を持つ国民だが、軍が戦争を始めたときには何も反対できなかったのである。

戦争はしだいに激しさを増していき、追いつめられた日本軍は最後まで抵抗した。そのためアメリカ軍は硫黄島の戦いで3万人を失い、日本本土への上陸では、さらに30万人もの若者が命を落とすと予想された。それを防ぎ、彼らを家族や恋人の元へ無事返すためにも、原爆を使用するしかなかったと今でも私は思っている。

あなたは、これらの意見文を読んでどう感じましたか？

どちらの内容も興味深いところがたくさんありますが、私たちが特に関心をもったのは次の点です。

ロバート・ワグナーさんの意見文では、最後に「戦争の時には、敵国の人命

より自國の人の命の方が大切にされた」と述べられている部分です。戦争中の心理状態としては当然でしょうが、むしろ当然なことが意見文の中に書かれていることに驚きました。

翌日、私たちの感想をエリザベスさんに伝えました。そして、彼女のお父さん（レオ・シマーさん）の意見文に対する彼女の感想を求めました。彼女は、「父が原爆投下に対してもつ考えは、彼の体験からやむをえない。」と答えてくれました。それとあわせて、彼女の体験についても話してくださいました。それによると彼女は英語指導助手として日本に行こうと思ったことがあり、そのことをお父さんに話したとき、彼は「なぜ日本なんかに行くんだ！」と反対したそうです。

彼もロバートさんと同じような戦場での体験をしたはずですから、敵国として日本をかなり憎む気持ちがあったのだろうと感じました。そして、その気持ちが娘に対する言葉に表れたのではないかと思うか。このような感想を持ちながら彼の意見文を読み直してみたとき、次のような疑問が生じました。

「このように日本を嫌っていた（憎んでいた）レオ・シマーさんが、どうして「日本人はすばらしい文化をもった国民だ」と日本人を高く評価するような意見を述べるようになったのでしょうか？」

あなたはどう思いますか？

この点に関してエリザベスさんは次のように話してくださいました。

「彼は長い間、日本を嫌っていました。しかし私が日本に関心を持って日本に渡ってから、少しずつ変化が生まれてきたようです。私も日本でのことを父に話したし、父も友だちから日本のこと聞くようになりました。そして、日本がどのようなところか、日本人がどのような人間なのかを知っていくうちに、しだいに日本や日本人に対する気持ちが変わっていったのではないかでしょうか。」

この話を聞くまでは、心のどこかに「戦争で傷つけ合った体験を持つ人たちが相手に対する憎しみの気持ちを越えて、理解し合えるようになることは無理な注文なのではないか」というようなあきらめの気持ちがあったように思います。ミネアポリス最後の夜、私たちは何度もこの英文を読み返し、「国際理解」の可能性を実感した喜びを語り合いました。

ただエリザベスさんが最後につけ加えた次の言葉が、私たちの今後の大きな課題となりました。

「ずっと長い間感じてきた感情を自分自身の力で変革していくことは、誰にでもできることではありません。オープンマインドな人やある程度の教育（大学教育）を受けた人ならば、自ら進んで自分の意識変革をおこなう場合もあるでしょうが、それは本当に数としては少ないと思います。」

「父のような例は実際には多くはないと思います。」

## 〈ワシントンD.C.で感じたアメリカ〉

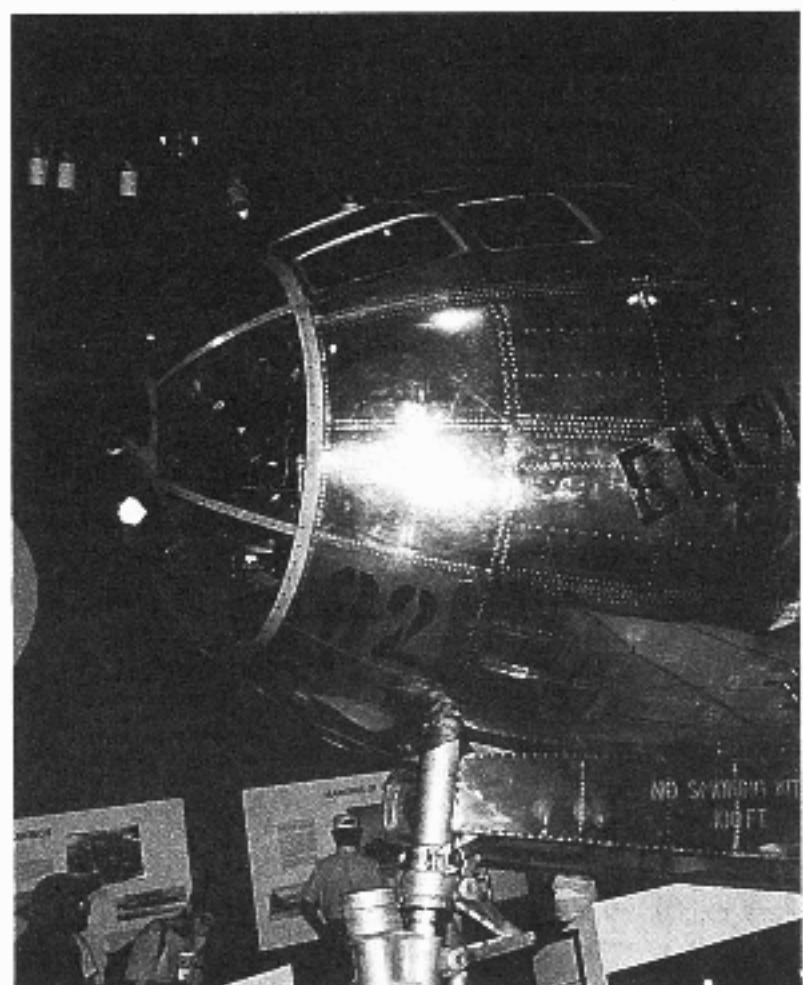
感慨深くミネアポリスのダウンタウンを飛行機の窓から眺めながら、私たちは次の訪問地であるワシントンD.C.に向かいました。飛行機からは広大な森の中に点々とビルがあるようにしか見えませんでしたが、空港から外に出てみると、そこは大都市の光景が広がっていて、何か不思議な気分になったのがワシントンD.C.の第一印象でした。

ワシントンD.C.はアメリカの首都であり、ここにはさまざまな政府の関係機関や記念館、博物館や美術館などがあります。

もしあなたが、ワシントンD.C.をまる1日見学するとしたら、どんな所に行つてみたいですか？

私たちはいろいろ話し合って、次の2カ所を見学することにしました。

それぞれどんなところだと思いますか？



写真Ⅰは「ホロコースト・ミュージアム」です。ここには第2次世界大戦中のナチスによるユダヤ人弾圧のようすを伝える数多くの遺品、写真やVTRなどが展示されています。私たちは10時の開館まで約3時間ならんで待ちましたが、開館の時には列の後ろが見えないくらい多くの見学者が訪れていました。

写真Ⅱは「スミソニアン航空宇宙博物館」の『エノラ・ゲイ展』のです。この展示は、今春から世界的なニュースになってきました。広島や長崎での原爆投下による被害を伝える展示をするかどうかについて、アメリカ国内でさまざまな議論がおこなわれたそうです。結局、被爆の展示は見送られることになりましたが、私たちは本物のそれを見てみたいと思いました。そして、見学者たちがどのようにその展示を見ているのかを知りたいと思いました。スミソニアン航空宇宙博物館は、同じ階の反対の端が見渡せないほど建物の規模が大きいところへ、ゆったり歩けないほどの見学者が訪っていました。『エノラ・ゲイ展』は1階の一角で催されていましたが、ここでも整理券を手に入れるために約2時間ならんで待たなければならぬほどでした。

「ホロコースト・ミュージアム」でも『エノラ・ゲイ展』でも共通して感じたのは、見学者がとても真剣に見学していたことです。おもしろ半分に見学していたような印象を受ける人は1人もいませんでした。「ホロコースト・ミュージアム」の方は展示内容が非常に生々しいので、見学者が圧倒されるのは納得できますが、『エノラ・ゲイ展』の方は正直言って意外でした。「エノラ・ゲイはアメリカの栄光の象徴だ」というふうに聞いていたので、お祭り気分での見学者が多いのではないかと思っていたからです。

原爆投下や被爆展示の是非についての意見はさまざまですが、少なくともそれらをいい加減に考えていない人たちが多くいる事実を私たちは肌で感じることができました。

### 〈アメリカの努力を学んだグリーンビル〉

私たちはミネアポリスとワシントンD.C.で、国際理解について希望を感じてきました。しかし、エリザベス・シマーさんが最後に言った言葉が妙に頭に残って離れませんでした。私たちがミネアポリスからずっと考えていたことは次のことだったのです。

真の国際理解を進めるためには、今の私たちの意識を多少でも変えていく必要があります。

- 私たち教師は、中学生と共にどのような取り組みをしていけばいいのでしょうか？
- 多民族社会であるアメリカの学校では、相互理解を進めるために、どのような努力をしているのでしょうか？

このような課題を抱きながら、私たちは最後の訪問地グリービルへと向かいました。ここではイースト・カロライナ大学（以降E.C.U.と表記）のベル先生が私たちのパートナーです。私たちは訪米の目的と上のような課題についてベル先生に話し、私たちが持ってきた日本の中学生の意見文をベル先生に渡しました。ベル先生も私たちにアメリカの中・高校生の意見文を渡して下さいました。事前に依頼していたアンケートを「サトリ・スクール」というサマースクールで実施し、35名分ほど集めてくださっていたのです。そして、お互いに相手国の生徒の意見文を読んでから、取り組みの方法を話し合うことにしました。

それぞれの国の意見文にはどのような違いがあったと思いますか？

すべての意見文をここに紹介することはできませんので、代表的な意見文の一部を示します。

日本とアメリカの中学生の意見文ですが、どちらがアメリカでどちらが日本のものであるかわかりますか？

#### 意見文Ⅰ

・・・お互いの文化を理解し、そこから何かを学ぼうとする姿勢が必要です。自分とは異なる文化を理解することは、自分の視点ではなく、相手の視点で物事を見る能够性が高まることにつながるようになってはじめて可能になるのではないかでしょうか。・・・（相手の）文化が持っている良さを認めようとしなければなりません。

何もかもが同じでなければならないということはないでしょう。・・・

#### 意見文Ⅱ

・・・私たちは同じ星の上に住んでいるのだから、互いに助け合うのが当然だと思います。・・・こういったことの実現を目指すのは、子どもである私たちには大変荷が重いことのように思えますが、まず自分たちが今いる教室や地域で、互いに助け合ったり友達の幸せについて考えていくことから始めるのがいいと思います。

意見文Ⅰはアメリカの中学生ラシュミ・ビセンさん（14歳／女）のもので、意見文Ⅱは日本の中学生亀山真美さん（14歳／女）のものです。意見文Ⅰの中に見られるように「自分と異なる文化」という言葉がアメリカの意見文には多く用いられています。これは日本の意見文には見られない特徴です。

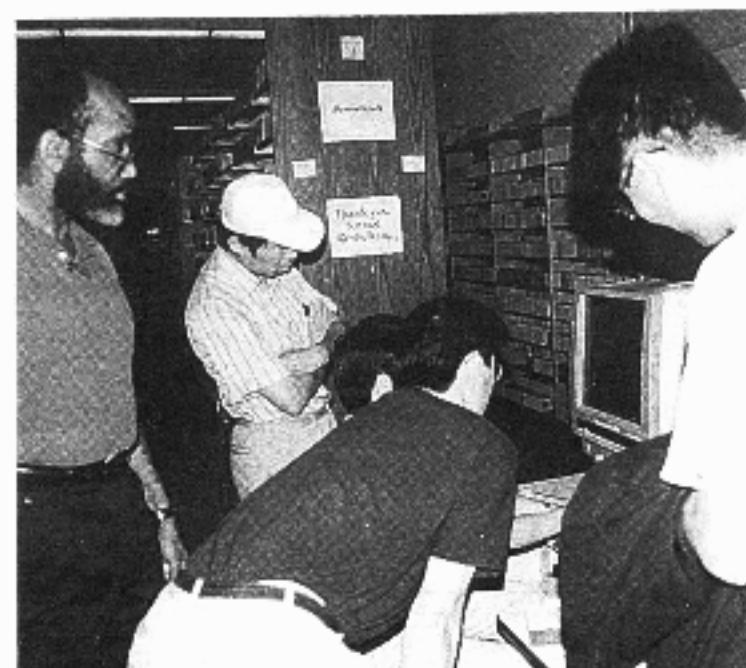
このような違いはいくらかありますが、私たちは、どちらの国の意見文も支え合う友達関係や社会を求めているという点ではむしろ共通の方が多いということに気づきました。

そこで私たちは、これまで戦争や平和について考えるときに互いの違いにばかり目を向けすぎていなかったかと反省して、もっと共通点に着目してこれらの問題を考えてみることができるのでないかと考えました。

ベル先生にそのことを相談すると、先生も賛成してくださいました。そして、太平洋戦争中の日米両国が相手国を「敵国」としてどのようにとらえていたかという点で、何か共通点があるのではないか、とアドバイスしてくださいました。第2次世界大戦中、日本では「鬼畜米英」という言葉が日常的に交わされていました。これと同じようなことがアメリカでもあったのでしょうか。

さっそく私たちはE.C.U.の図書館へ行きました。

右の写真は、私たちが図書館で調査しているようすを写したものです。何をしているのかわかりますか？



E.C.U.の図書館にはマイクロフィルムライブラリーというコーナーがあり、そこには過去の新聞の内容を新聞の種類と年代ごとにマイクロフィルムにおさめて保存してあって、調べたいフィルムを機械で映して見られると同時に、必要な部分があるとコピーすることもできるようになっていました。このような方法で膨大な情報を保管し、活用していることに驚いたのはいうまでもありません。アメリカでは他の大学でも同じような情報管理をしているそうです。

私は2日間、1941年から1945年までの「ワシントンポスト」と「ニューヨークタイムズ」のマイクロフィルムと「タイム」などの雑誌を風刺画を中心にして調べました。そこで見つけたのが次のものです。

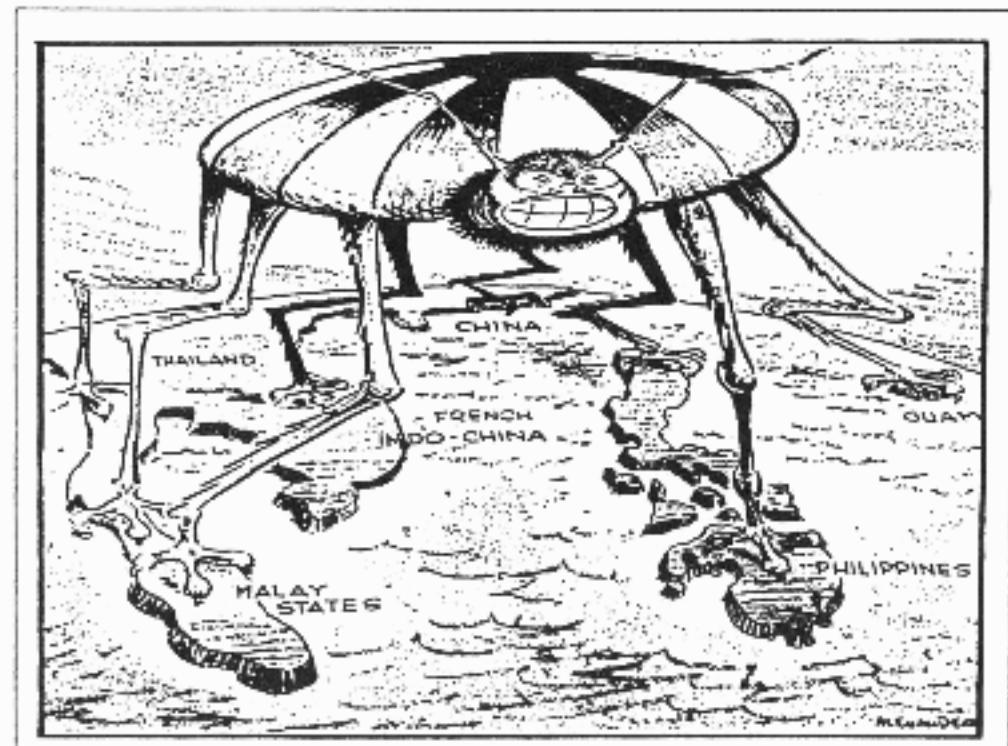
どのようなことを風刺しているのかわかりますか？

「ワシントンポスト」の風刺画（1942年2月24日）



「タイム」の風刺画（1942年1月12日）

これら2つの風刺画に共通していることが何かありますか？



2つとも、日本人が人間ではないものとして描かれていますね。しかも人間を困らせ、不快感をいだかせる存在として表現されている点で共通しています。日本軍による真珠湾攻撃が1941年の12月8日ですから、その1～2カ月後にアメリカ国内でこのような風刺画で代表される日本人のイメージが広がっていたことになりますね。

日本でもこのような風刺画は広まっていたのでしょうか？

この点については、帰国後に3人であちらこちらを探したのですが、アメリカに対する風刺画は見つけられませんでした。ただ「鬼畜米英」とされたもう一方の国イギリスに対するものは、太平洋戦争中のミャンマー方面作戦の時に、日本軍がミャンマーの人々に向けて大量にまいた次のようなビラを見つけることができました。

アメリカの風刺画と共通点はありますか？



このように戦争中は、お互いに相手を「人間ではないもの」と思い込もうとする気持ちがおこっていたようです。そしてレオ・シマーさんたちの例のように、戦争が終わっても憎しみの感情は消えずに残っていくものなのでしょう。ここでエリザベスさんが投げかけた課題が大きくのしかかってきました。

そのような意識を変えることは、本当にごくわずかな人しかできないのでしょうか？

また、戦争体験者の意識を変えることが困難であるとしても、現在の中・高校生の意識はどうでしょうか。今後同じようなできごとを繰り返したくないという願いは、日米のすべての意見文に共通していました。

その願いを実現できるようにするために、私たちはどんなことをする必要があるのでしょうか？

私たちはこのことについて考え悩み、ベル先生に相談することにしました。ベル先生は、どのような課題についてアメリカの教師の考え方を直接聞いてみるの

がいいだろうとおっしゃり、グリーンビルの高校の先生方を紹介してくださいました。そして私たちは、ローズ・ハイスクールを訪れて、3人の先生方にお話をうかがうことができました。

3人の先生方には、まず日米の中・高校生たちの平和に対する意見文を読んでいただきました。そして、「意見文で述べられている紛争や戦争のない社会を築いていくために、現在の中・高生にどのようなことを期待したいか」という私たちの問い合わせに対して、彼らは意見文を読んだ感想をまじえながら次のように答えてくださいました。

<ジェイ先生>

私が中・高生に考えてほしいことは、次の3つの点である。

1. 「戦争は年配者によって始められるが、実際に戦うのは若者である。」この引用は、戦争に関して、若者に次のようなことを教えてくれている。つまり、リーダーをかしこく選べ、リーダーの決定に疑問を持て、リーダーの決定に分別なく従うな、ということである。今の若者が、次の時代を担う年配者になるということを忘れてはいけない。
2. 世界の平和は身近なところからはじまる。つまり、暴力を大目に見るような国家は、自分たちの国の暴力を他国に拡げてしまう傾向にある。反対に、他者を親切にするなら、親切は他に拡がっていくものである。
3. 戦争を避けるべきであることはいうまでもないが、時としては、戦力をすぐに行使する方が、懐柔策によって事態を長期化させてもっと悲惨な方向へ導いてしまうよりもよい場合があるものである。

<ヴィッキー先生>

私は、この国のために戦おうと思っている生徒はいないと思う。彼らは国に対して「忠誠心」は持っているのではなく、ただそこに存在していると感じているようだ。そして、戦争が問題解決にはならないと考えているようなので、私としてはそんな彼らに「この国のために」という理由で戦いに参加してほしくない。そして彼ら自身にもそのように感じてほしいと思う。

・・・すべての文化の健康のために、愛すること、理解し合うことが、生徒たちが学ばなければならぬ最も大切な要素であると考える。戦争は真の問題解決方法ではなく、他者と話し合ったり、他者の考えを聞いたりしなければならない。そして自分がどういうものなのかを知って、互いを尊重し合えるようにならなければならない。

<フィリス先生>

私は、特に日本の生徒たちの意見文に対する感想を中心に述べます。世界平和は他の人間たちと話し合ったり尊敬し合うことによってのみ実現されるということに、あなたたちの多くが気づいているということがわかつて、私はとてもうれしい。

他の諸文化を学んだり、他の人々がなぜそのように生きているのかを理解することによってのみ、私たちは私たちみんながもっている違いのよさを認めることができるとと思う。

私たちはみんな異なっている。それは正しいとか正しくないとかということではなく、まさに異なっているのである。誰かが他者と異なっているからといって、分け隔てをしてはならない。むしろその違いのよさを認め、そこから何かを学ぶべきである。

あなたは、これらを読んで、どのような感想を持ちましたか？

ところで、多民族社会であるアメリカの学校では、1つの教室の中にさまざまな民族や文化をもった生徒たちが混在しています。そのような学校では、現実に「他者のよさを認める」ことは切実な問題となっているのではないでしょうか。このことについて、先生方に質問してみました。

まずヴィッキー先生が、日常の生徒たちの生活について次のように説明してくださいました。

アメリカの生徒は、本当の戦争がどのようなものであるかは知らないけれど、「身近なところで起こる戦争」は知っている。つまり、貧困・麻薬・離婚・殺人・その他の犯罪など、生徒が関わりうるもののことである。

前日に学校を出てから、何も食べずにまた学校へ来る子もいる。彼らにとっては、学校は安全なところである。また、何人かの生徒たちにとってみると、彼らが貧困であるがために、麻薬や窃盗した物を売ることの方が、たとえそれが違法なことであっても健全な市民になるための教育に打ち込むことよりも簡単なのである。

アメリカの学校では、本当に「さまざまな犯罪」と隣り合わせの現実があるのだということを、私たちはあらためて教えられたように感じました。

そしてフィリス先生が、日常生活での取り組みについて、次のように率直に答えてくださいました。

このような厳しい社会の現実を前提にしながら生徒たちの相互理解を深めていくことは、とても難しい問題です。たとえばこの学校にはキリスト教徒の生徒が多いのですが、彼らが宗教上の理由で祭日を祝うのを認めるのであれば、それと同様のことをイスラム教徒の生徒にもユダヤ教徒の生徒にも認めなければなりません。

学校生活のあらゆる場面で、このような配慮をするように努力していますが、私は教師として人間としていろいろ悩むことも少なくありません。

また、社会科の教師であるジェイ先生は、歴史の授業において努力していることを次のように話してくださいました。

世界史の学習の中には、相互理解を深めるチャンスはたくさんある。

民族主義的な考え方をこわすことは大切である。それは、他の民族や文化を尊重する方向で教え、他の文化を学ぼうとすることによって可能になる。

「違っていることはばかげたことではない」ということを学ぶことが、生徒にとって大切なことである。他の文化が残した業績や自分たちと同じような問題に直面していることを学ぶことは、「すべての人は平等である」という意識を形成するうえでとても重要である。また、「異なる文化に対して非難すべきではなく、理解することが大切である」ということを学ぶうえでも重要なである。

歴史的事実とそこにおける人々の考え（意思）を教えることができれば、人間の価値を高めていく教育に弾みをつけることができる。

歴史学習では、いくつかの項目（業績）についてディスカッションをおこなうような授業を構成している。そこでは、まず歴史的事実やその当時の人々の考え方に関して書かれた文章を読み、そこに何が書かれているかをとらえ、そのことが今の自分の生活とどのような関わっているのかを考えさせるようにしている。それは、自分の生活との関わりの中で事象をとらえられなければ、学ぶ意義が見いだせないと考えるからである。

私たちはローズ・ハイスクール先生方との話し合いを通して、さまざまなことを考えさせられました。ホテルに戻ってから、私たちはその話し合いの内容を整理し直しました。

そこで私たちは、3人の先生方の考え方には、「他者と違うこと」があたりまえであり、他者と「違うことのよさ」を認めることによって、互いが分かり合える、という考え方をもっておられることに気づきました。

私たちの話し合いはさらに深まっていきました。

1人ひとりの人間が異なっている存在であるということは、頭では理解できますが、自分と異なる他者を「すばらしい存在」として認めることは意外に難しいものですね。

そのために私たちは、日常生活の中で、どのような行動をすることができるようになればよいのでしょうか？

これは私たちの考え方や生き方にかかわる大きな問題ですね。先生方の話を聞きながら、私は日本に帰ってからの自分の生活をいろいろ思いめぐらせていました。私はこれまで「違っている方がいい」というような生き方をしてきただろうか。そして、これからはどのような生活をしていこうか。また生徒たちにどのような生活を期待していこうか。生徒たちに、アメリカでの体験をぜひ伝えよう。上に示したような問題を生徒に問い合わせてみたい。彼らはどのように答えるだろうか。・・・・・

翌日、私たちは7日間のグリーンビル滞在の最後の日を迎えるました。7日間、毎日私たちの資料さがしや訪問につきあってくださったベル先生に、感謝の言葉を伝えるべく、私たちはE.C.U.にベル先生を訪ねました。ベル先生は常に物静かで、決して自分の考えを他人に押しつけようとしない、愛すべき黒人紳士です。その先生が最後に、私たちに次のような言葉を贈ってくださいました。

知識が尊敬につながり、尊敬が寛容につながる。そして寛容が平和への道になる。

先生がどのようなことを言おうとしているのか、わかりますか？

先生によると、平和はさまざまな状況に置かれた人たちが、相互に理解し合えるかどうかにかかっていて、その相互理解を可能にするためには、次の3つのことが必要だということです。その3つのこととは、まず自分とは異なる民族や文化をもつ相手のことを知ること、次にその相手を尊敬する心をもとうとするここと、そしてそのような相手を寛容する心をもとうとすることです。また先生は、相手のことばかりではなく、自分の民族や文化に関する知識やそれを尊敬する心を大切にしなければならない、ということもつけ加えられました。

ベル先生に別れを告げてホテルに戻ると、1通の手紙が届いていました。それはミネアポリスのエリザベスさんからのものでした。

手紙の内容は、意見文を書いた中・高生に対するエリザベスさんのメッセージでした。日本に帰ってから、意見文を書いた生徒たちに伝えて欲しいということで、わざわざ送ってくださったようです。

みなさんが考えている「平和」について、私の今の考えを伝えようと思います。

世界は短時間で行き来ができるようになり、しだいに小さくなってきました。だから平和ということは大切になってきます。

自分たちは必ず誰か他者に頼っているものです。日本は中国に頼り、中国はロシアに、ロシアは・・・・。このように世界は1つの輪のようなものですから、どこかで戦いが起こって、その輪をこわしたら、世界は成り立たなくなってしまいます。

だからみなさんには、次のようなことをどんどんしていってほしいと願っています。

- ・障害者を助けたり、クリーンアップのボランティアをすること
- ・文通すること
- ・新聞記事を読んだり、そのことについて家族に伝えたりしながらいろんなことを知ること
- ・戦災を受けている人たちに何かを送ること・・・などなどです。

エリザベス・シマー

## 〈旅の終わりに〉

私が今回の調査を通して学んだことは数え切れません。1つ1つの体験を通して私自身の「国際理解」に関する意識が変革されていったような印象があります。これまで、「こんなにも違うのだ！」という視点で、他国や他民族や他文化をとらえようとしてきたように思います。しかし、日米の中・高生の書いてくれた意見文を読むと、それだけでは十分ではないということに気づきました。なぜなら、私の事前の予想に反して、日米の平和に関する意見文の内容がたいへん似ていたからです。

確かに日本とアメリカでは、それぞれの民族や国家が直面している状況にはさまざまな違いがあります。しかし、違いがあることを知るだけでは不十分です。互いの違いを認め合い、その上で平和な社会を築くために「共に話し合い・考えていく」ことの大切さにもっともっと注目していかなければならぬと思います。これからは、私はそのような考え方で生活ていきたいと決意しました。

私は「平和について」このようなことを考えました。  
みなさんも考えてみてください。

## [補助資料]

私たちは、このような体験にもとづいて、中学校での「国際理解の学習の展開例」を次のように考えました。

### <第1時>

1. ジョン=レノンの『イマジン』を生徒に聴かせる。  
(歌詞の内容に着目させる旨の指示を事前にしておきたい。)
2. 曲を聴いて、どのようなところが印象に残ったかを発表させる。  
(生徒の発言の要点を必要に応じて板書するようとする。)
3. 生徒に、平和に関する意見文を書かせる。  
(ここでは、生徒の今の率直な意見を書かせたい。)

### <第2時>

1. 日本の被爆体験記を読み、感想を述べさせる。  
(できれば被爆者の体験談を聞かせたい。)
2. 戦争中にアメリカの新聞・雑誌に掲載されたイラストと日本がミャンマーにばらまいたビラを提示し、気づくことを出し合わせる。  
(ここでは、提示されたイラストやビラに共通することとして、「戦争相手を敵としてとらえ、たたきのめそうとする感情があること」をとらえさせたい。また、そのような状況を体験したアメリカの人々が、今、戦争や原爆投下をどのようにとらえているのか、に関心を向けさせたい。)
3. 軍人として戦争を体験したアメリカ人が原爆投下について書いた意見文を読ませ、感想を述べさせる。  
(ここでは、「当時のアメリカの状況を考慮する必要がある」ことに気づかせ、異国・異文化を相手の立場や価値観に基づいて理解しようとする態度の育成を図りたい。)
4. 他国と戦争しあわない社会を築くためにどうすべきかを考えさせ、意見文を書かせる。

### <第3時>

1. 前時に書いた意見文を読み合い、内容を吟味・検討し合わせる。  
(生徒全員の意見文を読ませてもよいし、教師が意見内容を分類して提示してもよい。)
2. 「平和について望むこと」という題で日本とアメリカの中学生が書いた意見文を読み、クラスで話し合った内容と比較・考察させる。  
(ここでは、特にアメリカの中学生の意見文に着目させ、彼女が求めていることを理解しようとする態度の育成を図りたい。)

### <第4時>

本単元のまとめとして、国際理解を深めていくために、自分たちが今後どのような行動をしていけばいいかを話し合わせる。